

30名の壁を どう超える？

リーダーの約7割が痛感する「管理の限界」と、
組織に潜む見えない負荷の正体



人数増によるコスト増大を抑え、運用の安定を目指すリーダー必見！

CONTENTS

「30名の壁」をどう超える？ —— リーダーの約7割が痛感する「管理の限界」と、組織に潜む見えない負荷の正体

01 | 人数が増えると発生する問題

- p2 なぜ人数が増えると業務負荷が増えるのか
- p3 人数増加で増える具体的な業務負荷
負荷が増えた業務ランキング
- p4 人数増による課題は「情報共有・伝達」と
「タスク管理・担当の境界の曖昧化」

02 | 人数増に伴う負荷を高める要素

- p5 人数増が同じ内容を繰り返す「説明コスト」の負荷を押し上げる
- p6 人数増が「個別フォロー」の負荷を押し上げる

03 | 本来の業務への影響と改善余地

- p7 人数増による進捗確認や個別フォローは本来の業務に影響を与える
- p8 人数増は本来の業務に影響するが、仕組みによる負担軽減も可能

04 | 管理難易度が上がる人数ライン

- p9 24～25人を超えると管理が難しくなってくる
- p10 人数が一定以上になるとルール・ツール導入の必要性が顕在化
- p11 ルール・ツール導入が必要になる具体的な人数ライン
- p12 人数増に対する現在の管理方法の限界

05 | プロジェクト管理ツール導入の効果と課題

- p13 人数増とプロジェクト管理ツール費用の懸念
- p14 管理方法は複数に分散、既存の社内ツールを流用しているケースが主流
- p15 プロジェクト管理ツール導入で改善したこと—効果の実感—
- p16 プロジェクト管理ツール導入後に困ったこと—定着・コストの壁—

06 | まとめ

- p17 調査から見た人数増加が生む管理負荷の実態と、その解決策
- p18 エクセル、メール、チャットツールの限界を
プロジェクト・タスク管理ツール「Backlog」で解決
- p19 情報伝達とタスク管理の両方を連携
チームの仕事を前に進めるAI「Backlog AIアシスタント」
- p20 Backlogならチームの人数が増えても料金一律
- p21 タスクを可視化し一元管理 チームで使うならBacklog

<調査概要>

調査名:プロジェクト管理に関する調査

調査対象: 全国、20歳～59歳の男女（合計600名）

調査期間: 2026/2/20（金）～2026/2/24（火）

調査目的: 30名以上/以下のチームのマネジメントの負荷の実態と課題の把握

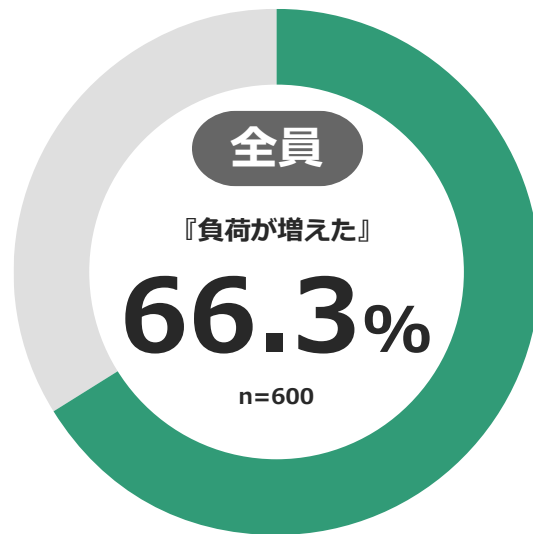
調査方法: インターネット調査

有効回答数: 600件

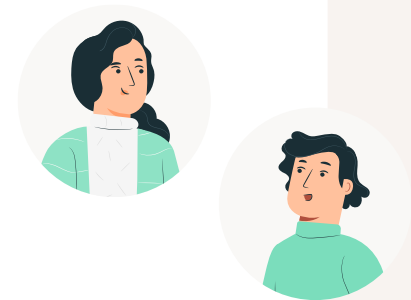
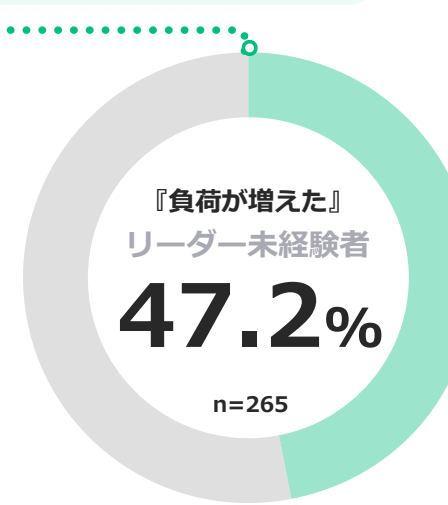
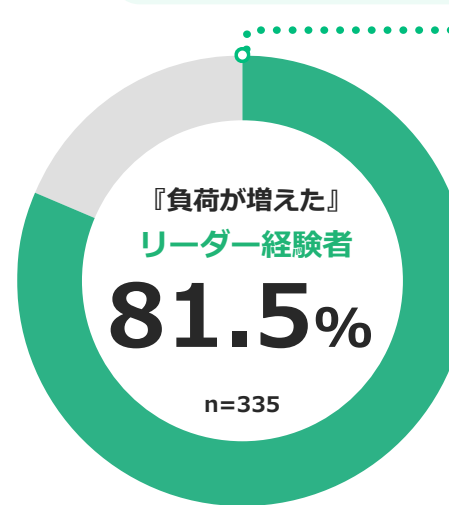
なぜ人数が増えると 業務負荷が増えるのか

チーム人数が増えるにつれて、業務や進捗管理の負荷はどの程度増えたと感じましたか。

「チーム参加経験あり かつ チームメンバー増加経験ありの対象者(n=2,640)」から、600人を抽出



リーダーになると、より負荷が増えることがわかる



POINT

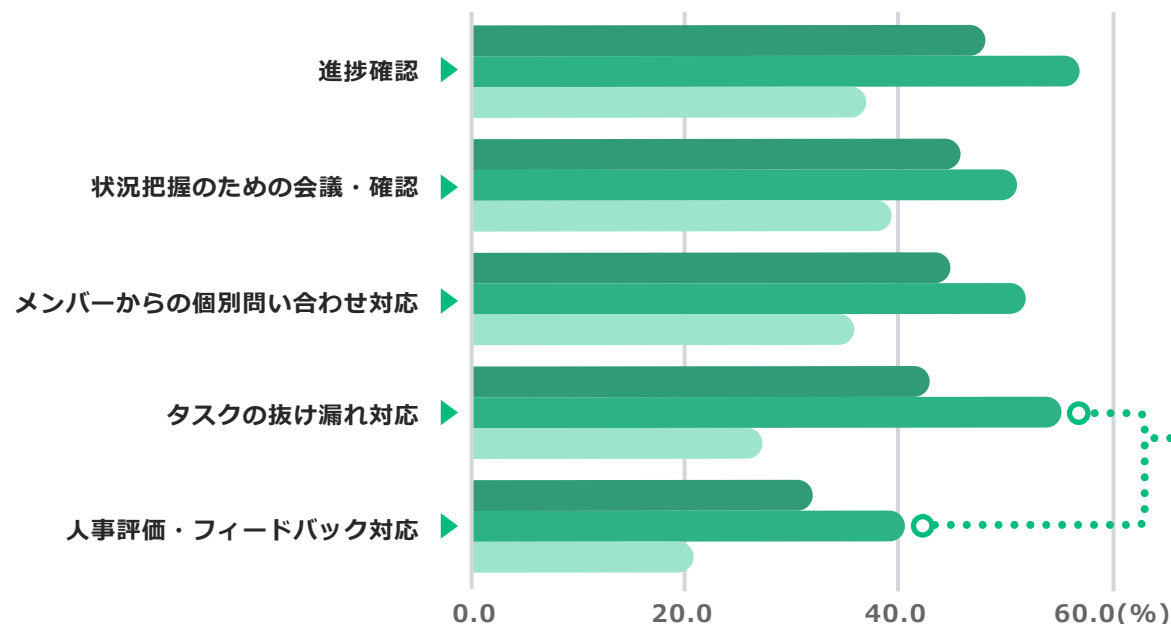
■人数増は「業務量 × 調整 × 情報管理」の複合負荷を生み、リーダー層の負荷増につながっている。

人数増加で増える具体的な業務負荷 負荷が増えた業務ランキング

チーム人数が増えるにつれて、負荷が増えたと感じる業務をすべて教えてください。（複数選択）

■ …全体 (n=600)
■ …リーダー経験者 (n=335)
■ …リーダー未経験者 (n=265)

【人数増加で負荷が増えた業務（複数回答）】



リーダーになると特に
「タスクの抜け漏れ対応」
「人事評価」の
負担が顕著に増えている

POINT

- リーダーになると、「全員分の進捗・優先度の把握」と「最終確認」が求められ、負荷は単純加算以上に増大する。
- 「個別対応」「最終責任」というタスクの集中が、リーダーの目に見えにくい管理負荷を押し上げている。

人数増による課題は「情報共有・伝達」と「タスク管理・担当の境界の曖昧化」

プロジェクトを進めるにあたり、以下の事象はどの程度生じていましたか。それぞれあてはまるものをひとつ教えてください。

人数増加により発生する 課題の頻度 n=600

- 1位 引き継ぎ時の情報不足
- 2位 同じ内容を複数人に説明する必要がある
- 3位 他メンバーの状況が見えない
- 4位 調整のやり取りが増える
- 5位 プロジェクト全体の進捗把握・報告に工数がかかる
- 6位 自分がどこまで対応すべきか迷う

情報共有・伝達に 関する課題の頻度 n=600

- 1位 引き継ぎ時の情報不足
- 2位 同じ内容を複数人に説明する必要がある
- 3位 他メンバーの状況が見えない
- 4位 説明が簡略すぎて、内容を理解しきれない
- 5位 誰に何を伝えたか管理しきれない

タスク管理・担当の境界の曖昧化に 関する課題の頻度 n=600

- 1位 引き継ぎ時の情報不足
- 2位 プロジェクト全体の進捗把握・報告に工数がかかる
- 3位 自分がどこまで対応すべきか迷う
- 4位 タスクが整理されず遅延してしまう
- 5位 優先順位の認識不一致
- 6位 担当/責任者が曖昧

POINT

- 人数の増加により、情報共有の負荷が増え、タスク・役割の境界の曖昧化が進むと、プロジェクト運営が非効率になってしまう。



人数増が同じ内容を繰り返す 「説明コスト」の負荷を押し上げる

同じ内容を複数の人に繰り返し説明するために、週あたりどれくらい時間を使っていますか。

※現在チームに参加していない人は、直近でチームに参加していたときのことでお考えください。

【同じ説明を繰り返す時間（週あたり）】 (n=600)



10分未満
10分～30分未満
30分～1時間未満
1時間～2時間未満
2時間以上

【チーム人数による同じ説明を繰り返す時間（週あたり）】

9名以下
n=100

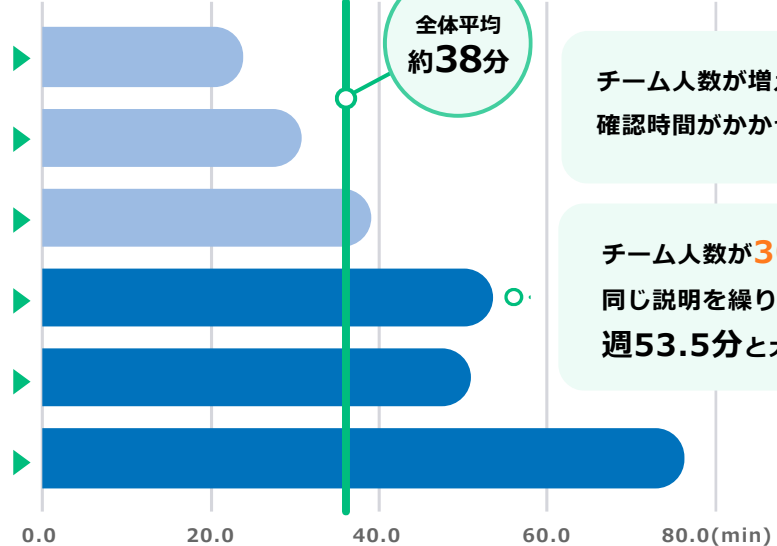
10～19名
n=100

20～29名
n=100

30～39名
n=100

40～49名
n=100

50名以上
n=100



全体平均
約**38**分

チーム人数が増えるにつれて
確認時間がかかっている

チーム人数が**30名**を超えると
同じ説明を繰り返す時間が
週**53.5分**と大幅に増加

POINT

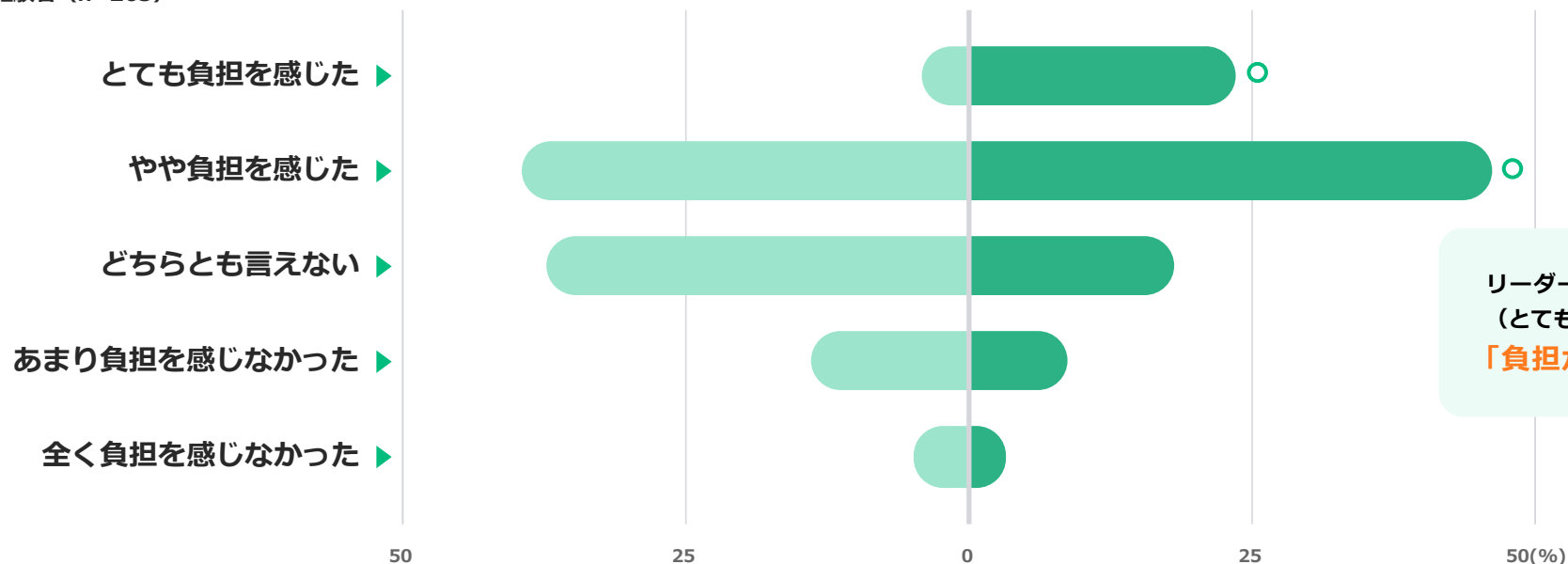
- 組織の人数が増加するにつれて、同じ内容を何度も繰り返す「説明コスト」の業務負荷が明確に高まる傾向がある。
- 繰り返し発生する説明への対応が、人数増に伴う大きな負担要因（ボトルネック）となっている。

人数増が 「個別フォロー」の負荷を押し上げる

チームの人数が増えたとき、メンバー1人ずつの進捗確認やフォローを個別に行うことについて、どの程度負担を感じましたか。

■ ...リーダー経験者 (n=335)
■ ...リーダー未経験者 (n=265)

[1人ずつ個別フォローの負担感]



リーダー経験者は**69.9%**
(とても23.6%+やや46.3%) が
「負担が大きい」と回答

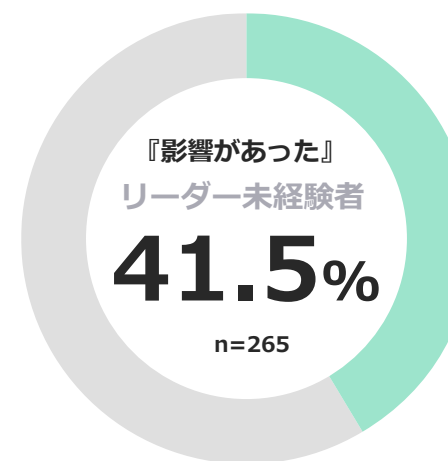
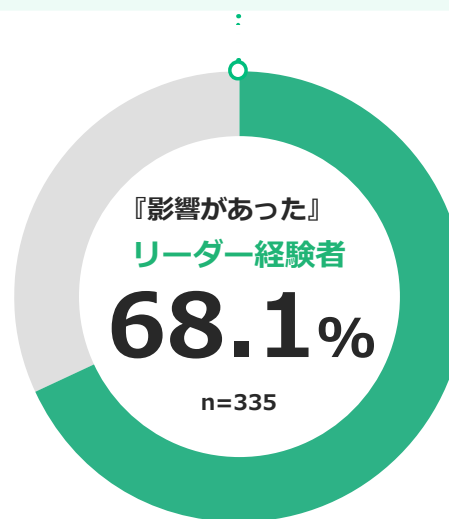
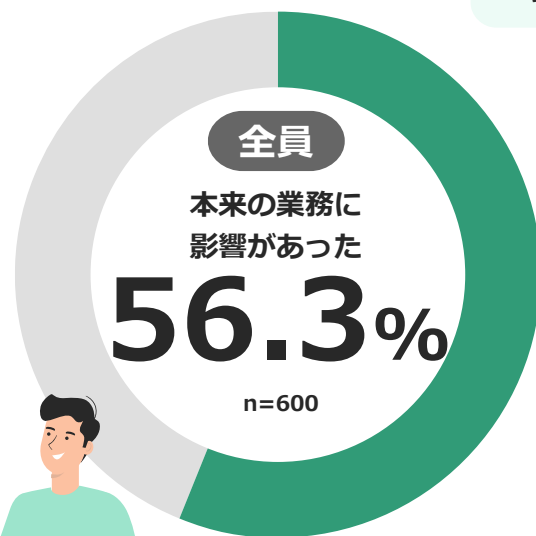
POINT

- 人数が増えるほど、メンバーの個別フォロー業務が過重化している。
- 情報共有の仕組みを整備したり、チーム規模に応じたマネジメントを考えたりする必要がある。

人数増による進捗確認や個別フォローは本来の業務に影響を与える

チーム人数が増えたことで、メンバー1人ずつの進捗確認やフォローに割く時間は、あなたの本来の業務にどの程度影響していましたか。（影響度）

リーダー経験者の**68.1%**（とても20.0%+やや48.1%）が「**本来の業務に影響があった**」と回答



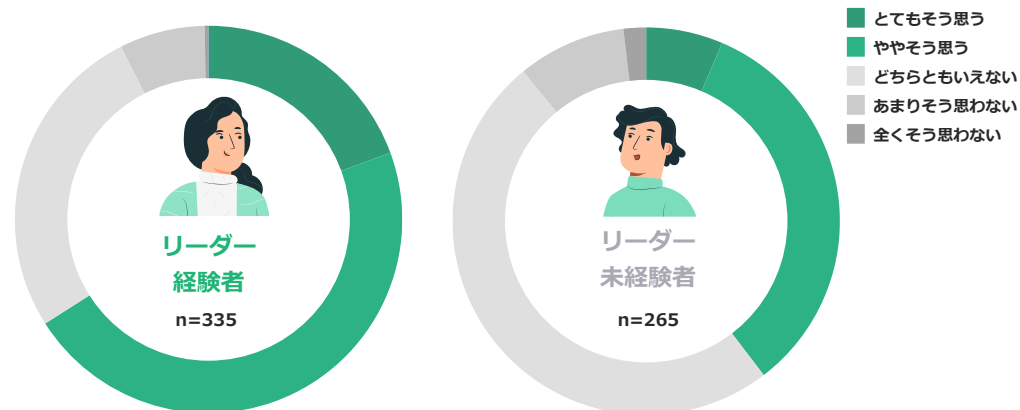
POINT

- 進捗確認や個別フォローの増加が業務圧迫につながり、特にリーダーの負荷が高い。
- リーダーと未経験者で負荷感に大きな差が生じており、負荷の集中を防ぐための運用改善が求められる。

人数増は本来の業務に影響するが、 仕組みによる負担軽減も可能

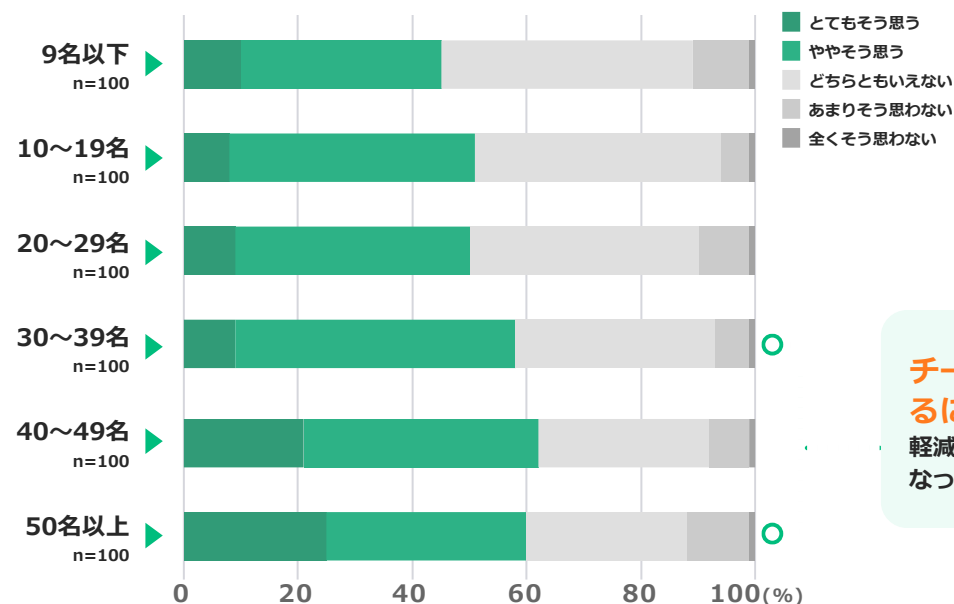
チーム人数が増えたことで発生する進捗確認やフォローの負担は、やり方や仕組みによって軽減できると思いましたか。（期待度）

〔仕組みによる負担軽減への期待（リーダー経験別）〕



リーダー経験者は**66.0%**
(とても19.4%+やや46.6%) が
「**仕組み改善で軽減できる**」と回答

〔仕組みによる負担軽減への期待（人数別）〕



チーム人数が増えるにつれて、負担軽減への期待が大きくなっている

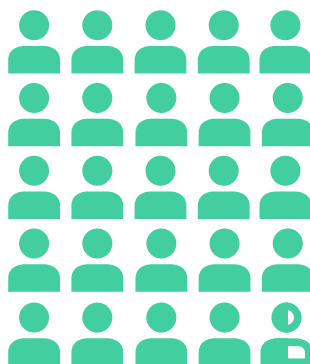
POINT

- リーダーの6割以上が仕組み改善による負担軽減を強く期待しており、課題意識も高い。
- 特に30名前後になると、負担軽減のための仕組み化が不可欠なフェーズに入る。

24～25人を超えると 管理が難しくなってくる

チーム人数について「この人数を超えると、チームを管理・把握する負担が大きそう」と感じ始めるラインを教えてください。

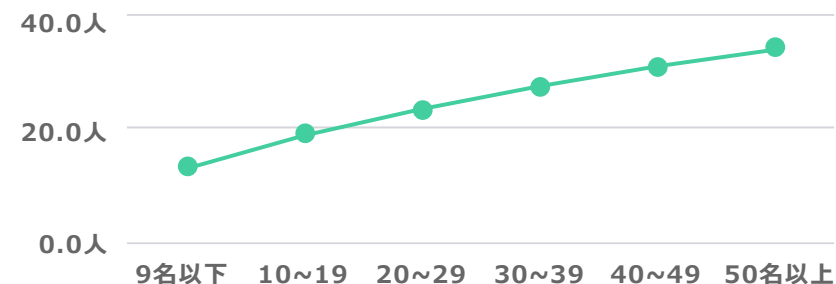
【管理が難しいと感じる人数】 (n=600)



平均
24.5人

リーダー経験の有無にかかわらず
24～25人あたりで管理負担が大きくなると感じ始める

【管理方法の限界ライン（人数別）】 (n=600)



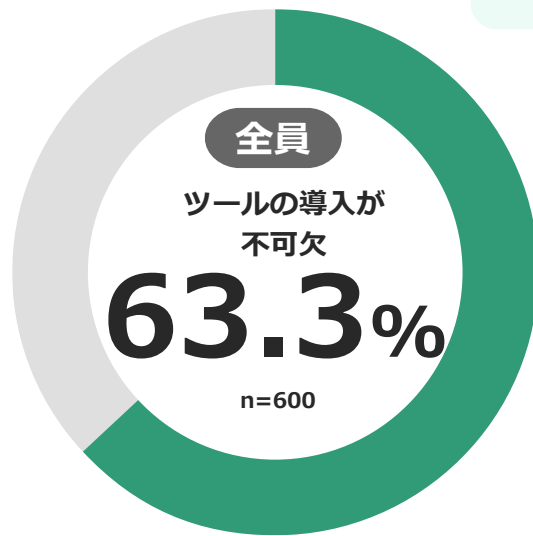
チーム人数が増えるにつれて管理の難しさを感じているが、
「50名以上」のチームでも平均値は33.8名で落ち着いている

POINT

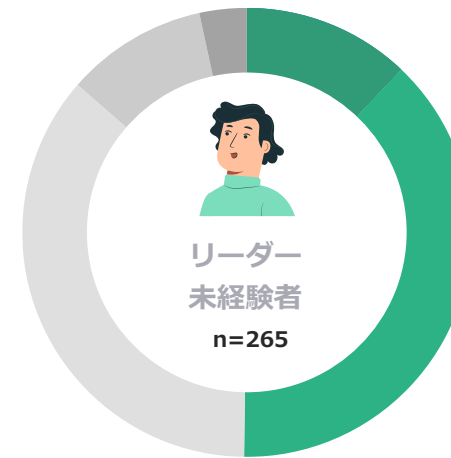
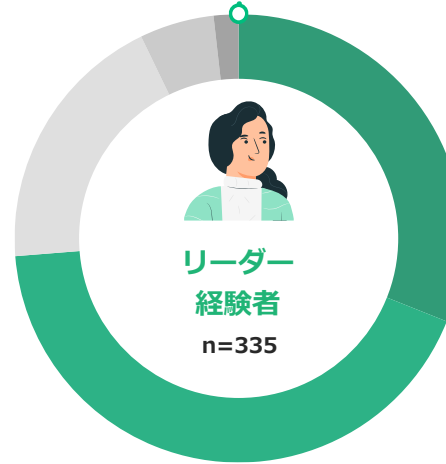
- 25人あたりから属人的な管理は限界に近づく。
- 30人を超えると説明コストや個別フォローが急増するため、仕組みによる運用の転換が不可欠になる。

人数が一定以上になると ルール・ツール導入の必要性が顕在化

チーム人数が一定以上になると、業務ルールや管理ツールの導入が不可欠だと思いますか。



特にリーダー経験者の**73.7%**（とても31.0%+やや42.7%）が
「ルール・ツール導入は不可欠」と回答



■ とてもそう思う
■ ややそう思う
■ どちらともいえない
■ あまりそう思わない
■ 全くそう思わない

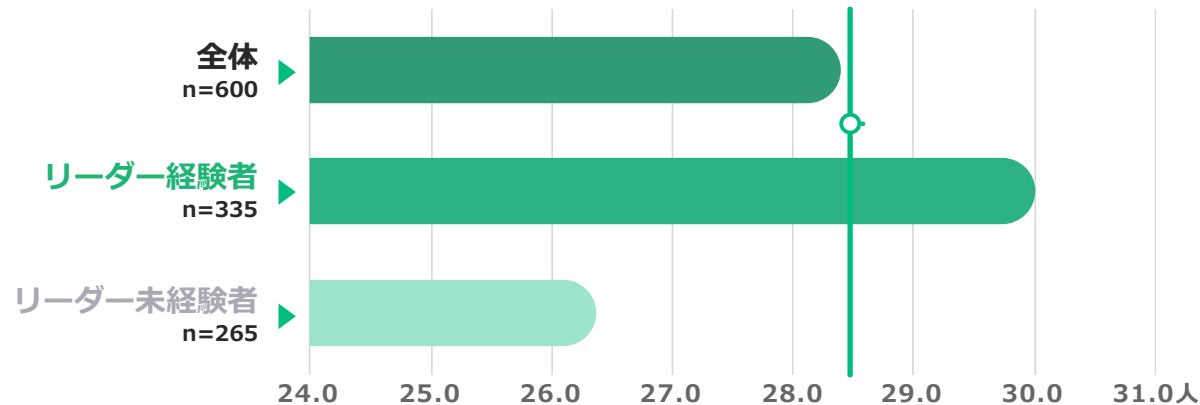
POINT

- チーム人数が増えるほど運用の複雑さが増し、ルールやツール導入の必要性が高まっている。
- 現場の中でも特にリーダー（管理側）に課題が集中していることが示されている。

ルール・ツール導入が必要になる 具体的な人数ライン

業務ルールや管理ツールが不可欠だと感じるのは、何名以上のチームだと思いますか。

〔ルールやツールが必要だと感じる人数ライン〕



リーダー経験の有無にかかわらず、
必要性を感じるラインの平均

 **28.4名**

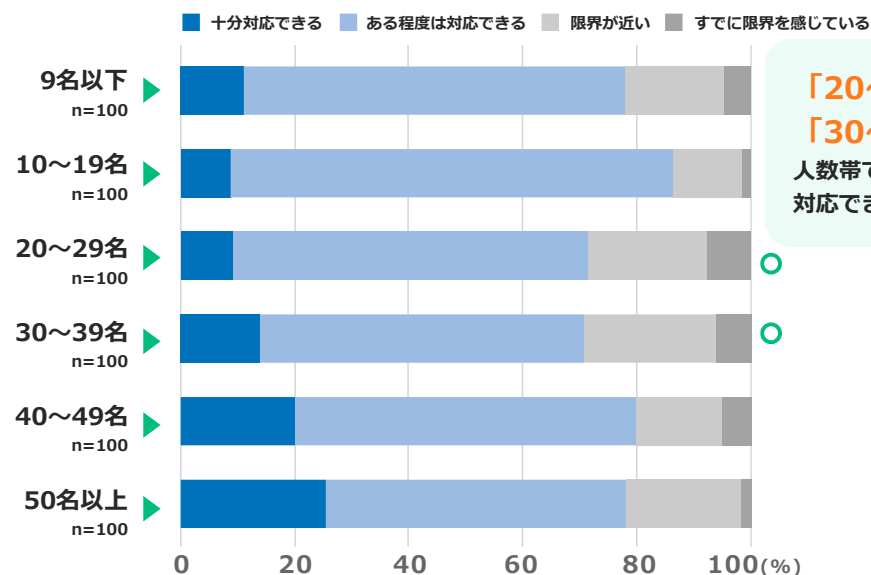
POINT

- 管理負担が大きくなるライン24～25名（p9）とルールやツール導入の必要性を感じるライン（28.4名）がほぼ一致している。
- 24～25名という規模が、従来の管理方法から新たな仕組みへの移行を迫られる具体的な分岐点（人数ライン）となっている。

人数増に対する 現在の管理方法の限界

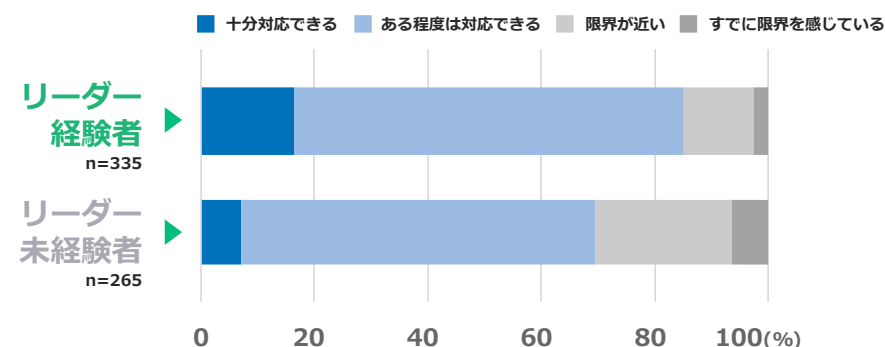
現在、または直近で参加していたチームの管理方法は、今後チーム人数が増えた場合にも十分対応できると思いますか

〔現在の管理方法で人数増に対応できるか（人数別）〕



「20～29名」から
「30～39名」の
人数帯では、これ以上の増加に
対応できないという意識がある

〔現在の管理方法で人数増に対応できるか（リーダー／未経験）〕



リーダー経験者
▶対応可能 85.1%

リーダー未経験者
▶限界 30.6%

.....
両者の認識に
ギャップがある

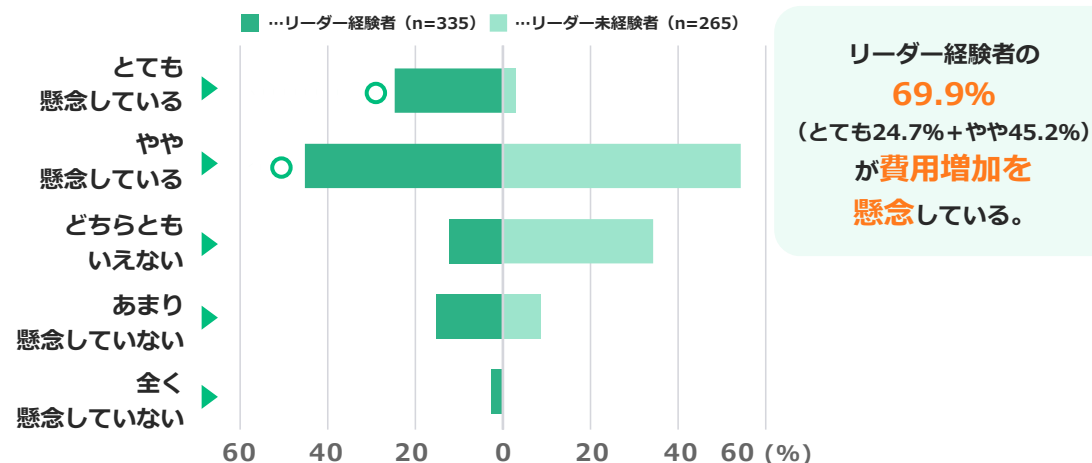
POINT

- 組織規模が20名～39名に達すると、「限界が近い」「すでに限界」と感じる割合が急激に増加する。
- 「対応できている」と考えるリーダーに対し、メンバーの約3割はすでに管理の限界を感じている。

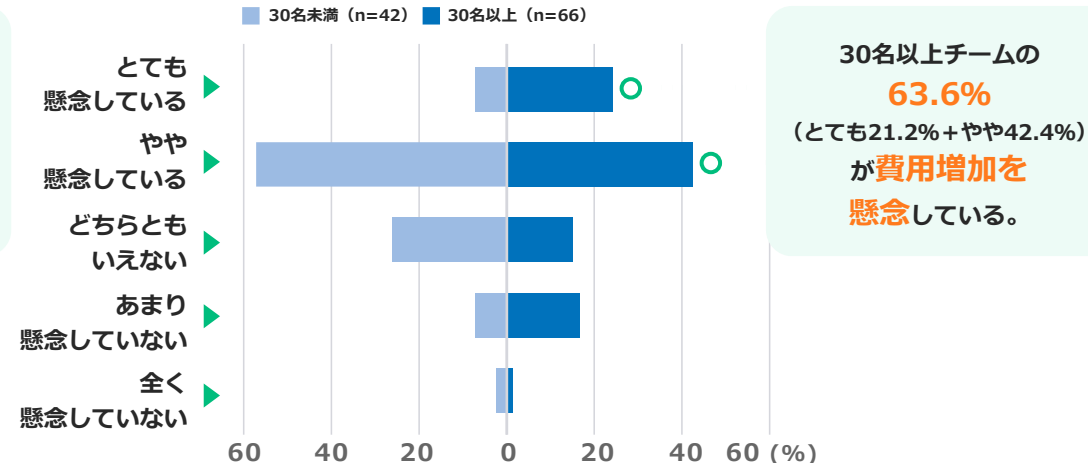
人数増と プロジェクト管理ツール費用の懸念

チーム人数の増加に伴い、プロジェクト管理ツールの費用が増加することにどの程度懸念を感じますか。

〔費用増加の懸念（リーダー経験者／未経験者）〕



〔費用増加の懸念（30名未満／30名以上）〕



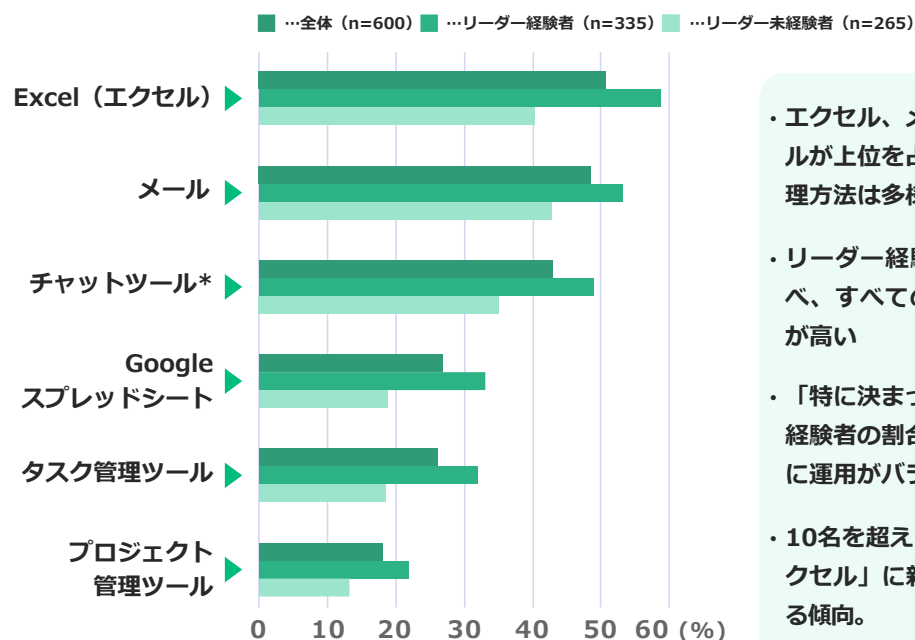
POINT

- リーダーの約7割がチーム人数増に伴うプロジェクト管理ツールの費用が増加することを懸念している。
- リーダー層が現在の管理方法に固執してしまう背景として、ツール導入に伴う費用の存在が示唆されている。

現在の管理方法は複数に分散、 既存の社内ツールを流用しているケースが主流

現在、業務・進捗管理に使用している方法をすべて教えてください。

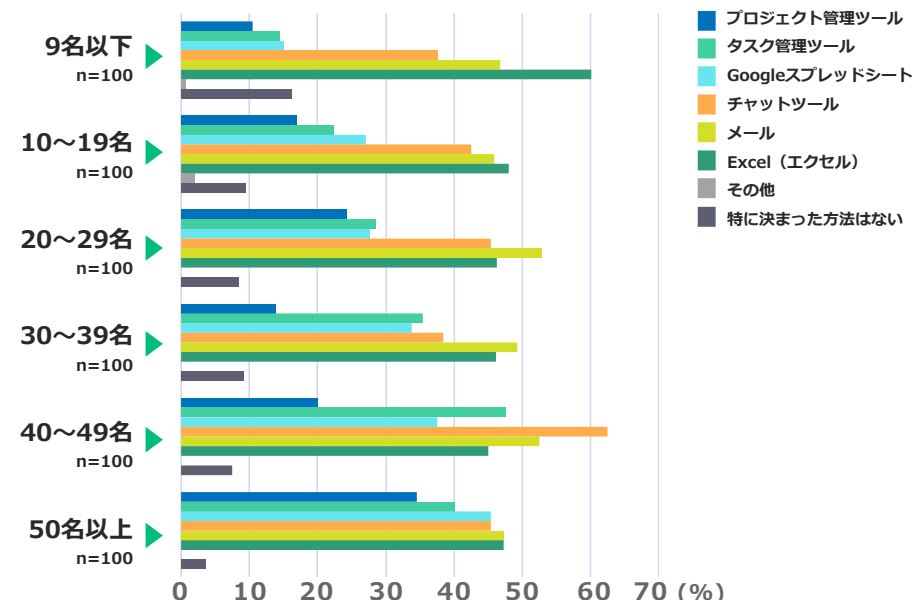
【現在の業務・進捗管理方法】



- ・エクセル、メール、チャットツールが上位を占めているものの、管理方法は多様で分散している
- ・リーダー経験者は未経験者に比べ、すべての管理方法で利用率が高い
- ・「特に決まった方法はない」は未経験者の割合が高く、チームごとに運用がバラついている
- ・10名を超えると、「メール」「エクセル」に新ツールをアドオンする傾向。

*Slack・Microsoft Teamsなど

【現在の業務・進捗管理方法（人数別）】



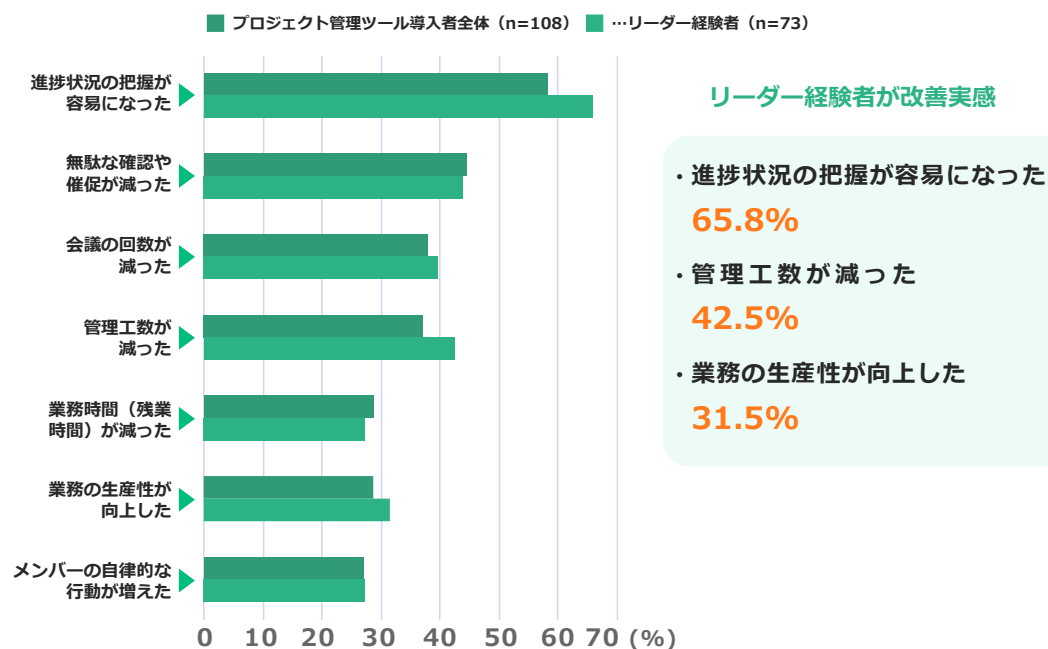
POINT

- エクセル・メール・チャットなど、複数の無料ツールを組み合わせで管理している状態が多いことがうかがえる。
- プロジェクト管理専用ツールではなく、すでに社内で導入されている他の用途のツールを流用して管理しているケースが主流。

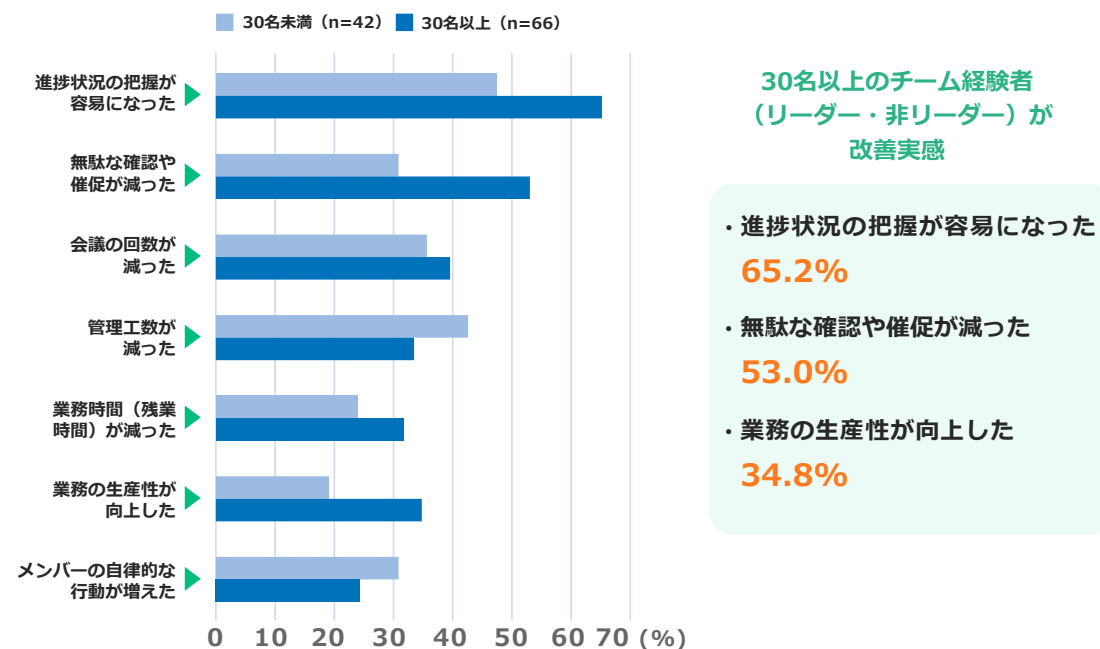
プロジェクト管理ツール導入で改善したこと —効果の実感—

プロジェクト管理ツールを導入した後の変化について、あてはまるものをすべて教えてください。

【プロジェクト管理ツール導入後の効果（全体／リーダー）】



【プロジェクト管理ツール導入後の効果（30名未満／30名以上）】



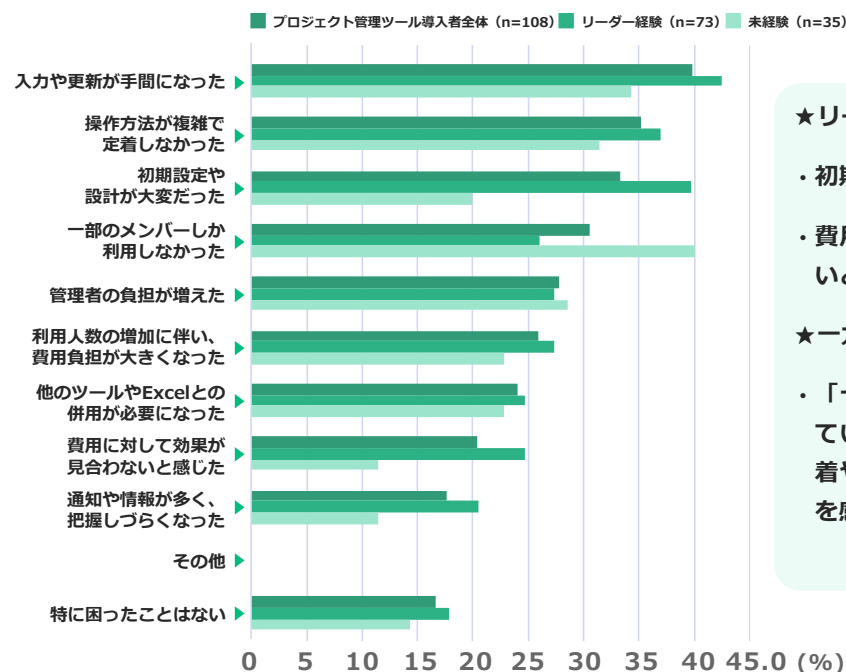
POINT

- リーダー経験者でツール導入による「進捗の可視化」や「情報共有」への改善効果が高く評価されている。
- 30名以上のチームにおいてタスク管理の負担軽減効果がより顕著に表れている。

プロジェクト管理ツール導入後に 困ったこと 一定着・コストの壁

プロジェクト管理ツール導入後に、困ったことや負担に感じたことをすべて教えてください。

【プロジェクト管理ツール導入後の課題（リーダー経験者／未経験者）】 【プロジェクト管理ツール導入後の課題（30名未満／30名以上）】

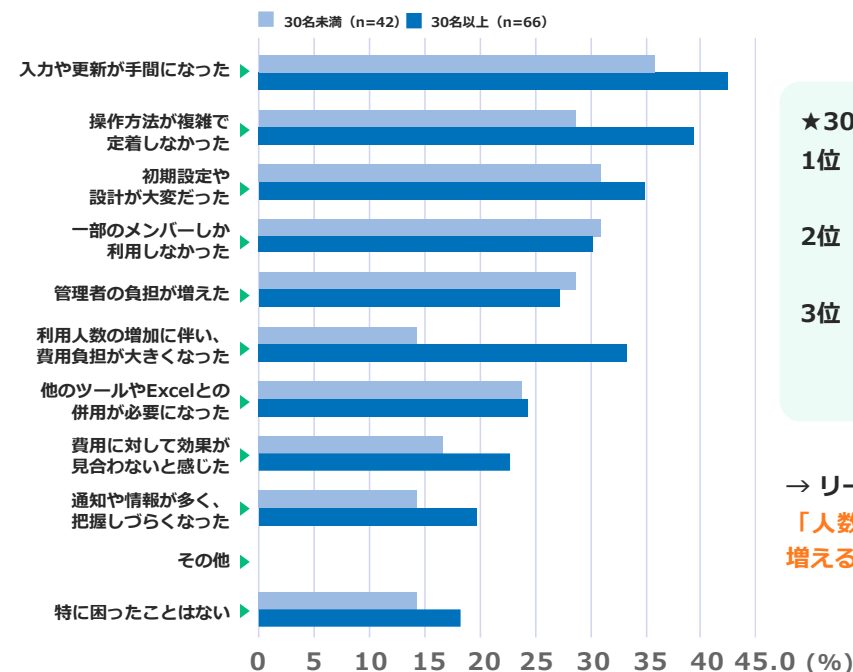


★リーダー経験者は

- ・初期設定や設計が大変だった
- ・費用に対して効果が見合わないと感じた

★一方未経験者（メンバー）は

- ・「一部のメンバーしか利用していない」といった運用の定着やアカウント付与への課題を感じている



- ★30名以上のチームでは
- 1位 入力や更新が手間になった
 - 2位 操作方法が複雑で定着しなかった
 - 3位 利用人数の増加に伴い、費用負担が大きくなった

→ リーダーは
「人数に比例して費用が増える」懸念が強い

POINT

- ツール導入後の課題としては、入力や更新の負担といった「運用定着の手間」が最も多く挙げられている。
- チームの人数増加に伴う「アカウント費用の高騰」も、懸念事項として浮き彫りになっている。

調査から見た人数増加が生む管理負荷の実態と、その解決策

実態と課題 01

人数増加により発生する進捗確認・調整・情報管理の負荷増大

- 20～30名を境に管理難易度が上昇し、表面上は回っているように見えても、背後では負荷が積み上がる

解決策 01

情報集約・一元化による進捗管理の効率化

- タスク／担当者／期限／履歴を一箇所に集約できるため進捗確認や説明の手間、会議・催促時間の削減
- 情報の一元化はAI活用の基盤となり、要点抽出やレポート作成、個別フォローにかかっていた時間を削減

実態と課題 02

リーダーを縛る「コスト懸念」

- 人数が増えるほど、ツール追加や運用変更が必要になるが、リーダーの約7割がチーム人数増に伴うプロジェクト管理ツールの費用が増加することを強く懸念している

解決策 02

定額制で「リーダーのコスト懸念」を払拭

- 料金一律のツールなら、人数が増えても費用が膨らまない
- 「増員＝コスト増」という不安がなく、導入判断がしやすい

実態と課題 03

ツール導入後に待つ「定着」と「費用」の壁

- 新しいツールを導入しても、「使いこなせない」「定着しない」という壁が発生しやすく、複数のツールを併用すると管理負荷・コストも増える

解決策 03

誰でも使えるシンプルさで「定着の壁」をクリア

- UIがシンプルで直感的なため、現場がすぐ使えるようになり定着しやすい
- 複数のツールを併用せずに済むため、運用が統一され、管理負荷も軽減

エクセル、メール、チャットツールの限界を プロジェクト・タスク管理ツール「Backlog」で解決

Backlogなら、**タスクの優先順位、遂行状況が明確**。人数増で顕在化する情報伝達・タスク管理の課題を解消しつつ、**25〜30名超の運用負荷にも対応**。シンプルでわかりやすい操作性ですぐに使い始められます

情報伝達の複雑化を解決する機能

ドキュメント

プロジェクトのマニュアルやナレッジを蓄積・共有。
新メンバーが入るたびに**同じ説明を繰り返す必要がなくなり、**
情報の属人化を防ぐ

タスク（課題）に 紐づいたコメント

タスク（課題）ごとに直接コメント
して会話ができるため、やりとりが
流れない。
後から参加したメンバーも文脈を容
易に把握



ファイル共有 機能

関連する資料をプロジェクト内で一
括管理でき、最新のファイルがどこ
にあるか迷う手間を省く



通知・ お知らせ機能

課題の更新、追加、コメント投稿を**必要な相手に絞って通知**

タスク管理の複雑化を解決する機能

ガントチャート

プロジェクト全体のスケジュール
と各タスクの進行状況を可視化。
誰が・何を・いつまでにやるかが
明確



カンバンボード

タスクのステータス（未対応、処
理中、完了など）をカード形式で
一覧表示。**チーム全体の作業負荷**
やボトルネックを直感的に確認可
能



親子課題の 関連付け

複数人で対応する大きなタスク
（課題）を複数の子タスク（課
題）に分割し、それぞれに担当者
や期限を設定。作業分担や、課題
の進捗状況が明確



情報伝達とタスク管理の両方を連携

チームの仕事を前に進めるAI「Backlog AIアシスタント」

蓄積された業務データからAI アシスタントが「今、何が起きているか」を即座に分析・可視化

繰り返される情報共有時間のロスと管理負荷を最小化し、チームが本来向き合うべき業務に集中できる環境を実現

課題・ドキュメントの検索・要約

課題内の膨大なやり取りやコメントをAIが要約し、背景や経緯を整理

メンバー増員時に同じ説明を繰り返すコストを削減し、途中参加者でも即座に状況をキャッチアップ

滞留リスクの抽出

期限が迫っている課題や、コメントが止まったままの「滞留タスク」をAIが自動で抽出

人数が増えて個々の状況が見えにくくなっても未然にトラブルを防ぐ

レポートの自動生成

プロジェクト全体の進捗率や、成果やリスク、今後の予定をAIが集計・分析し、報告レポートを作成

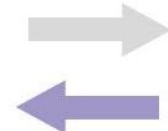
手作業で情報を集約する手間を大幅に削減。チームの状態をデータで客観的に把握

週次報告・
進捗サマリ作成

プロジェクト横断の
状況確認

メンバーの
マネジメント

チャットで
話しかけるだけ



自社データに
基づく回答

蓄積された課題やコメント、
ドキュメントからプロジェ
クトの状況を自動で整理・
要約・分析



Backlog
AIアシスタント

情報伝達と
タスク管理の両方を連携

backlog
by nulab

社内データ



課題



コメント

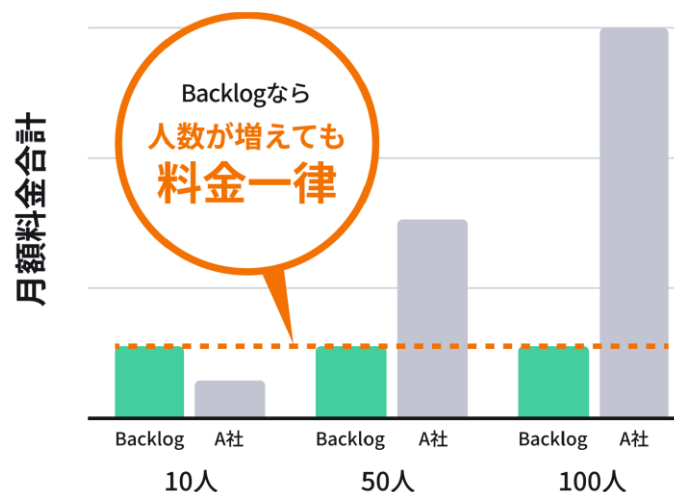


ドキュメント

✓ 直接参照

Backlogならチームの人数が増えても 料金一律

プロジェクト拡大でメンバーが増えても、**人数に応じた追加課金を気にせず柔軟に招待できるのは、**
エクセルや人数課金型ツールにはない大きなメリット



POINT

管理負荷を感じる人数増でも
コストが上がらない

※安定した運用を維持するため、
ユーザー数は最大10,000人までが推奨



Backlogは**ユーザー数が無制限※**のため、
メンバーが増えても**月々の利用料金は一律で変わりません。**

タスクを可視化し一元管理 チームで使うならBacklog

無料トライアル実施中！
ぜひお試しください



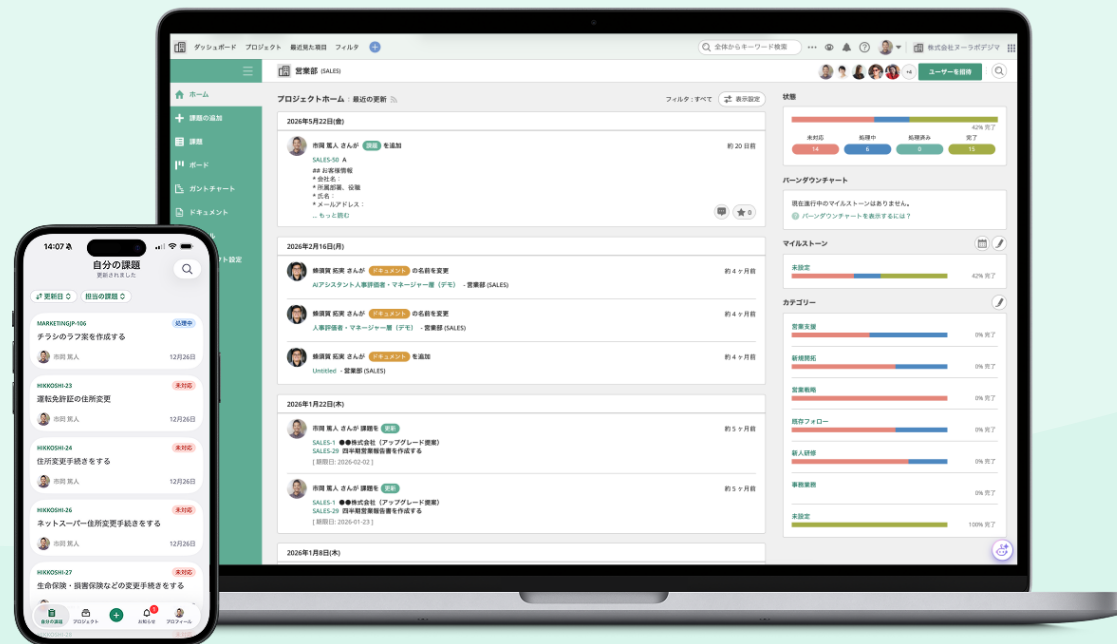
すべての機能がご利用可能
30日間無料で試す



Backlogがよくわかる！
資料をダウンロードする



製品情報はこちら
Backlog公式サイトを見る



導入に関するご相談・ご質問は[こちら](#)よりお気軽にお問い合わせください。

会社概要

社名 株式会社ヌーラボ

設立 2004 年 3 月

事業内容 チームのコラボレーションを促進するサービスの開発・提供

- プロジェクト・タスク管理ツール「Backlog」
- オンラインホワイトボードツール「Cacoo」
- 組織の情報セキュリティ・ガバナンスを強化するツール「Nulab Pass」
- ワークフロー自動化ツール「Nulab Flowbase」

本社 福岡県福岡市中央区大名一丁目 8 番 6 号